

プロジェクトN ①

共生への決断

「老い」はだれにもや
つてくる。長く連れ添っ
た夫婦にも別れが訪れ
る。「生きるということ
は、しんどいことやで」
—老人ホームを訪ねる
中で何人もの老人たちか
ら聞かされた言葉だ。だ
からこそ可能な限り安ら
ぎのある暮らしを求めた
い。血縁を超えて助け合
って暮らす共生の家を造
れないものだろうか。も
ちろん、それは決して容
易なことではない。数多
くの様々な「決断」と
「選択」が必要となる。

「選択」が必要となる。
だが、私たちは「筋書き
の読めないドラマ」でも
あることを承知で、ひと
つのプロジェクトに踏み
出すことにした。これは
その同時進行ドキュメン
トである。(敬称略)

ことし3月末のこと、

ナルク奈良のボランティ
ア仲間である唐沢・今朝利
(74)・友江(70)夫婦の
誘いでS子(74)と向平
すむ(64)・次子(60)
夫婦が信州への小旅行を
楽しんだ。異常高温のこ
の春、日本列島の海岸線
はすでに葉桜に移りつつ
あったが、ここではウメ
とサクラがいっしょに咲
いていた。

唐沢は現

職時代の専
門技術を活

かして奈良の園芸ボラン
ティアグループを主導
し、仲間から「園芸の神
様」の尊称で慕われる存
在だけに花をめぐる話題
は豊富。花びらが舞う中
で「なぜ、花は散るのか」
の話が、いつしか「人の

私の土地を使って



イラスト 島嶋 孝一

て困ったわ「脚の骨がも
ろくなって何度も骨折で
入院した人だけど、約束
の日に訪ねたら、床で転
んで起き上がれないでい
しきりと出た。
朝からずっとその姿

で私が来るのを待ってい
たって言うの。80歳を過
ぎると急速に進む判断力
の衰えをめぐる体験談も
しきりと出た。
戸建てが並ぶ住宅地で

花散る里で
望外の提案

が、ずっと心
に引っかかっ
ていた。

そのことを

10年も経く
ことなく思
考の範囲外
だったよう
だったよう

だ。さらに200万円で
浴室改造も契約していた
ことがわかり、女性が消
費者センターに連絡して
契約解消にこぎつけた
が、なんともやりきれな
者に身近に接し、若い先

も一人暮らしの高齢者が
増えている。現役時代は
エリートで鳴らし、今も
元気そうに見える70代後
半の男性の家にリフォー
ム業者が入りし始め
た。気になって確かめた
ところ、トイレ取り替え
の簡単な工事に120万
円の支払い契約をすませ
ていた「月1万円の支払
いのできるトイレにな
ると言われたから」とい
う。それが120万円、
が群を抜いていること
が、ずっと心
に引っかかっ
ていた。

奈良市を走る私鉄駅の
ターミナルに近く、自動
車道へのアクセスも整備
され、買い物も便利だし、
近くは大型のクリニック
もあるという場所。4人
は驚き、そして歓声を上
げた。唐沢は「それが出
来たら、僕が木を植える
に行きますよ」と叫んだ。

数日後、向平はナルク
の会員でもある友人の建
築家2人にこの話を伝え
た。その2人からまた、
思いもかけない提案が飛
び出した。

散り際」に移
っていった。

女性3人は

高齢者宅に出
向く家事援助

ボランティア

の経験を積ん

でいる。「家事

ができないか

らボランティ

アを呼ぶので

プロジェクトN

(2)

共生への決断

「私の土地が皆さんのお役に立つなら」——信州への旅の中でS子から出された思いがけない提案。向平すむは友人の建築家、平野五朗(61)と増田史男(58)に連絡を取った。「それ、例の研究会の実践版として願ってもない話じゃないですか。シニアの共同ハウスを実現しましょうよ」。2人の口から全く同じ反応が返ってきた。

平野と増田は3月末まで大手住宅メーカーで建築家として働いていた。平野は高齢者のための家づくりを提案するカルチャーセンターの館長を務め、増田は都市づくりから老人ホーム、グループホームなどの施設建設まで、さまざまな設計を担当して大臣賞を2度受賞したベテラン。ともに「住む側」の立場を考えてきたし、とりわけ増田は住まいにからむNPOの組織づくりを志していた。それだけに、ナルクが会員、一般に呼びかけて開設する「暮らしと住まい研究会」への参画を向平から打診され、ともに大乗り気で準備に入っていたところだった。

数日後、S子の案内で3人は現場に立った。奈良市が同市西大寺で進めて来た区画整理事業地の一角。2車線のメイン道路と1車線路が交差する角地にある。南北に長い54m×16.5mの整然とした更地。北の近鉄西大寺駅のターミナルやデパートのビル群へは歩いて7分ほどの距離。南には垂仁天皇陵の森が望める。西大寺駅からは大阪、京都、奈良、名古屋へとつながり、第2阪奈自動車道の起点も近くにあり、大阪市内に

S子から土地の状況を聞く増田、向と平野



これこそ理想の地

は車で15分ほどで行ける。周辺は平城宮跡をはじめ、古代史や古寺探訪には事欠かない場所。「本来、高齢者の住宅施設は街の真ん中にあるべきなのに、不便な場所を追いやられているのが現状。ここは交通、買い物などのアクセスとい

い、土地の形といい最高の場所。参加者の条件さえ整えば、北欧で広がり始めたコレクティブハウスの建設が可能。日本でも珍しい例になる。平野は高揚し、増田も大きくうなづいていた。これほどの土地をなぜ、提供する気持ちにな

ったのか。3人はS子に改めて確かめた。彼女は淡々と語った。1昨年の暮れに転んで腰を痛めたとき、1カ月以上も家事援助のボランティアに来てくれたのが、ナルク奈良の仲間だった。親類や近所からも見舞いの金品が届けられたが、寝込んでいる身には、ナルクの会員が届けてくれる大根の煮物の方がありがたく思えた。年が明けて2月に回復すると、仲間10人が「快気祝い」のパーテ

現地を訪れ
ふくらむ夢

たちが定年になるころに返してもらえる。その時になら残りの人生に役立つは「土地は多くの人に喜んでもらえるようにしたい。みなさんの役に立つならうれしい」。そして、示されたのが「借地の地代は毎年の固定資産税分を払える範囲で」という条件。祖母としての深い思慮と愛情を込めての決断だった。増田は「S子さんの好意と期待に応えられる建物をつくりたい。市場価格の半分以下になるはず」。そして「それだけに、入居者をどう募めるのか、そのための理念をきちんとしておくことが力になる」と付け加えた。向平はS子の意思を再確認できてうれしかった。好立地に出来上がるシニアの共同ハウスを思い描きながら、興奮を禁じ得ないでいた。そこで創り出される暮らしは、これまでだれもが経験したことのないものになるに違いない。「共生の暮らし」の舞台、コレクティブハウスの概要は心得ているつもりだが、具体化へ向けての確たる書き真はまだ、ない。

向平はナルクがこの10月に計画しているスイス・オーストリア研修旅行に参加する際、現地にあるコレクティブハウスを見学しようとした。同行の希望者があれば募りたいとも考えている。建物の設計と必要な費用の試算へ向けて増田と平野も動き出した。

(敬称略)

プロジェクトN

③

共生への決断

奈良市西大寺区画整理と熱心に取り組んでいる事業で造成されたS子の所有地を確認した後、平野は奈良市役所に出かけて建築確認に必要な条件などを調査、これを受けて増田は設計図の作成に入った。この間、向平は「共生の家」づくりが日本での程度進んでいるのか、インターネットも検索しながら調べていた。ひとり暮らしの高齢者の増加とともに各地で大きな関心が盛り上がりつつあることがわかった。

その冊子の冒頭でふれあい型グループホームがめざすものとして、次のように書かれていた。

「共生型すまい全国ネットワーク」を組織化し、元気な高齢者を対象とした「ふれあい型グループホーム」の拡大をめざす運動

新しい仲間と自由気ままな家をつくる。それは夢に過ぎないのでしょう

神戸で開かれたフォーラム



新しい老後の創造

か。いや、若いというものの正面から向き合っている姿勢があれば、それはもう老いを共有する生きる仲間なのです。私たちは年齢の違い、男女の違い、趣味や特技の違いはあっても、共有するものに忠実になろうとする思いがあれば、その違いを乗り越えた「生活の代弁し、励ましてくれる

向平の思いをそのまま

一文だった。ちょうど、さわやか福祉財団が映画とフォーラムで考える「自立と共生の新しい住まい方」を神戸で開くことを知り、向平は妻の次子と出かけた。400席の会場はほぼ埋まり、8割方が中高年層。圧倒的に女性が多かった。ナルクの親しい会員の顔もあった。フォーラムでは、阪神大震災で住まいを失った高齢者のために日本で初め

「宅」実現の推進役となった建築家の石東直子は「扉一枚に閉ざされ、誰とも話をせず、誰にも知られずに死んでいく県営住宅の被災高齢者の実態を知り、日本版コレクティブハウスをつくる」と思い立った。居住室の1割の広さを出し合って共同スペースを設ければ、そこに集まることで、たまたま大家族になれる。自室に入れば独りになれる。いわば「平成の長屋」と話した。

関心高まり 各地で動き

1フロアに8室と50平方メートルの共同室、4階建てで60歳以上の男性14人、女性16人が住む大倉山住宅の代表若崎洋三がそこで暮らしている。向平や増田たちが考える共生の家は、プランの設定の段階から有志が一緒に考え、議論を重ね、資金を出し合って「究極の合意」を家というかたちにするものだ。その「たき台」づくりのための調査と研究を進めている。まだまだ、時間が必

要なようだ。(敬称略)

プロジェクトN ④

共生への決断

神戸で開かれたさわやか福祉財団主催の「自立と共生の新しい住まい方in神戸」から帰ってまもなく、唐沢友江から向平に思いがけない電話がかかった。3月末の信州旅行で、同行のS子から土地を提供する話が出たとき、一緒にS子の話を聞いて以来、彼女もずっと「共生の家」づくりについて考えをめぐらしていたのだという。

奈良市郊外のマンションにある向平の自宅

に計画を立てた人物がいたなんて。向平は二つ返事でその日を持った。中島豊(52)が妻の幸子(49)の運転する車でやってきた。左足が不自由で、幸子と唐沢に両側を支えられながら3階までの階段を登って来た。向平が中島を自宅に招いたのは理由があった。このマンションは斜面に沿って階段状につくられ、1階と2階の屋根の一部に土が盛られ、ガーデンになっている。3階に住む向平は2階屋根の30平方メートルで菜園と花壇を楽しんでいる。新しい「共生の家」にも小庭園を取り入れたと考えており、建築にもくわしい

「奈良県内で教師をしていた時の教え子が20年前に福祉の家建設に取り組んでいた。結果としては断念したんだけど、仲間が助け合って暮らすことでは全く同じ考え方。これからの参考になると思うし、話を聞いてはどうかしら。お宅へ案内しますから」唐沢の声は弾んでいた。20年も前

中島の意見が聞きたかった。年齢より若く見える中島は熱い思いを話した。幼いころに股関節を脱臼し、リハビリ担当者の不手際で矯正に失敗。小学生の時期は療育園に通う日々だったが、普通学校

に転入して熱心に勉強、高校で養護教諭だった唐沢に出会い、大学に進んで奈良県橿原市の職員となった。福祉、建設、教委の仕事を経て今は企画の主幹を務める。高齢者政策が今ほどは語られなかった20年前、

老人福祉課の係長だったころ、高齢者のための施設が困窮者救済の「措置」や「収容」という言葉で論議されることに抵抗を感じていた。高齢者施設を入居者の立場に立つてつくるにしても「社会福祉法人」だと補助金は出るものの、制約、規制でがんじが

ど、地域の自然空間をみながら共有しようという構想。中島が自費でドイツへ出かけて学んできた「グリーンツーリズム」の再現だった。国や県にも説いたが、砂防ダムが崩壊しないよう土石を取り除くこと

先を行く人がいた

20年前の挫折

踏まえて助言

らめ。思いを活かすことは不可能だった。行政の枠を超えた自力での住まいと環境づくりを志す。山間の小さな集落に住む叔父が土地の提供に応じてくれた。中心部に高齢者の共住棟をつくり、周囲に訪ねてきた家族やボランティアの宿泊ロッジを散在させ、高齢者も一緒に寝泊りできるようにする。集落の農家は高齢者や家族らの食材を提供するとともに農作業と一緒に楽しむ

いながら断念の理由を語り、「でも、今なら皆さんの構想は実現できますよ。出来ることはなんでも応援します」と言った。向平のガーデン案に賛成し、間伐材の活用と緑地空間のある家づくりを提案。帰るとすぐ都市緑化基金などの助成資料をFAXで送ってくれた。向平はインターネットでスウェーデンのコレクティブハウスについて検索してみた。東芝が「コミュニティ」(care to

share.co.jp)でふたつの例を紹介していた。40歳から77歳の人たちが一緒に住む例があった。個室は自分の思いのままに部屋作りをし、ハウスから出勤している人もいれば、退職者同士で趣味を楽しむなど生き方は自由。ただ、共用部分での食事づくりや掃除は当番制で協力し合うため、共同を維持するための規則を守ることが共生の大事な力ギになる。それでも互いの個性を活かしあう暮らしなので、他人を喜ばせることに生きがいを見つけていることが多い。「一人でいる時には経験しなかった喜び」とあった。



イラスト・島嶋 孝一

思うからだ。(敬称略)

プロジェクトN

⑤

共生への決断

NALCの会報から「シニア情報紙」へ。7月号から紙面を一新した「アクティブライふ」の1面トップ記事は、△「安住の館」ともに探ろう△のカット見出しを掲げて参加を呼びかける「ナルク暮らしと住まい研究会」の発足だった。元気なうちから暮らしのあり方について点検・計画し、最後まで生きがいを保つことができる住まいの環境を見つけ出そうというねらい。発表から3ヵ月、様々な波紋、反響が広がる中、研究会の第1回講座「老後とお金」が9月23日、大阪産業創造館で開かれた。

お彼岸の中日、中高年にとっではいささか不都合な日取りだったにもかかわらず、近畿一円から60人が集まった。講師は米国会計基準に準拠したCFPの資格を持ち、フイナンシャルプランナーの指導・育成にも当たる小澤昭彦。「60歳から必要な経済の知識」をテーマに「地球規模で社会変化が進む中で個人の暮らしも大きく変わっていく」と話し「高齢者は今から自己責任による自立を心がけていく必要に迫られている。老後の経済的なプランをつくり、財産簿を整備しておきたい」と強調。年金、保険、相続などの具体的な備え方を解説した。これを受けて蒲田雄輔（ナルク吹田）がライフプランの立て方を説明した。

2人の話に関心が集ま



イラスト・島嶋 孝一

熱気の中で初講座

り、休憩時間にも個別の質問や相談が相次いで予定の時間を1時間もオーバー。研究会の賛助企業となったパナホーム株式会社（大阪）が会場に特設した「リフォーム・土地活用相談所」にも「母

ののためのホームエレベーターを」などの相談が次々寄せられた。こうした熱気の後で奈良・西大寺での「共生の良」が会場に特設した「リフォーム・土地活用相談所」にも「母

めざしたい▽入居のための費用は経費の実質価格で算出したい——などを挙げた。

当日の参加者たちに記入してもらったアンケートの結果は、建築構想を組み立てている増田を喜ばせるものだった。向平の構想提案に対し、60人のうち25人が「入居したい」「入居を検討したい」と答えていて、「共生」への関心の高まりが感じられた。増田はこの人たちが建設現地を建設現地へ案内し、さらに具体的に説明する会合の準備にさっそく入った。

とはいえ、向平は課題と抱えていた。大阪での研究会は無事離陸できたものの、東京で予定している研究会をどうするかだった。研究会への登録者もまだ数人しかない。ところが、その不安をかき消す知らせがナルク埼玉西会員の飯田康夫

予想を越える
関心の高まり

から舞い込んだ。大阪の研究会の結果を話してほしい。できたら埼玉西で立ち上げたい。埼玉西と埼玉はさわやか福祉財団が川越市で開いたフォーラム「自立と共生の新しい住まい方」を応援、会員100人が参加するなど大いに気運が盛り上がっているのだという。

9月30日、川越に出向いた向平を、駅前ビルの1室で代表の田口修や飯田ら拠点運営委員の6人とフォーラムを運営したコミュニティネットワーク協会常務理事の鰐淵祐司が待っていた。鰐淵は「アクティブライふの△安住の館△を読んできたら、ずっとお会いしたいと思ってました」と歓迎してくれました。話ほとんどん拍子に進み、両組織の協働による研究会の設立と、第1回会合の開催要領別掲が決まりました。

向平は「共生へのうねり」のようなものを実感した。（敬称略）

プロジェクトN

⑥

共生への決断

元気なうちから老後の暮らしや住まいのあり方を考える「ナルク暮らし」と住まい研究会」の第1回講座が9月末に開かれた際、奈良・西大寺プロジェクトの取り組みについても報告があり、参加者から意見や感想を聞いた。その声も参考に設計に取り組んできた増田史男の仕事が、ひとまずの区切りをつけた。

昨年の初夏にこのプロジェクトが持ち上がって

以来、増田は2階建て案↓平屋案↓2階建て一部3階案と手直しを繰り返した末、それぞれの長所を活かした「平屋または2階建て案」に落ち着いていた。平面図はその1階部分である。

増田はナルク宝塚・川

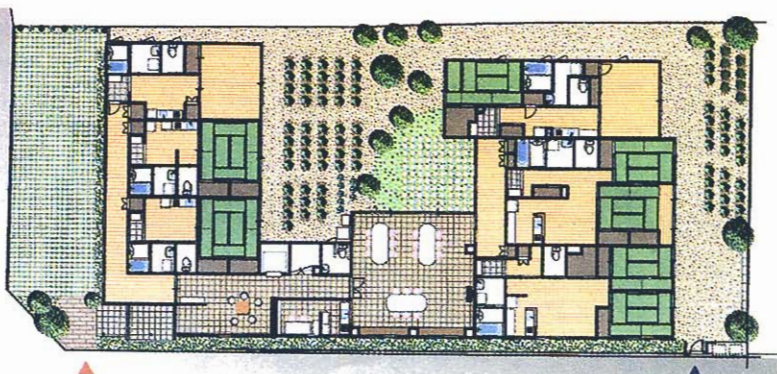
西の会員。住宅会社パナホームにいた時代は、ニュータウンなどの街づくりから高齢者福祉施設、小さいものでは痴呆性老人のためのグループホームまで一貫して福祉型建築物の設計に携わってきた。単に机上の計画だけでなく、数々の福祉施設の現場や海外での先進施設の視察を重ねたうえで設計にかかる「住まい手重視型」の建築家。

こんども西大寺の用地を再三訪れ、「共生の住まい」に関する講演会などにも次々参加して構想の基本を練

った。西大寺で住むことになる限られた人たちのための特定のプランでは決まらず、これから深

充実の日々の舞台

まる高齢者の住環境の変化を見通したうえで、仲間増田の福祉



々なデータを探して応援した。

敷地890平方メートルのうち建物が占める面積は50%。西側にはメイン道路、北側も道路に面

は50%。西側にはメイン道路、北側も道路に面

多様な声聞きプラン育てる

する角地とめるのも特徴。1階には玄関・サロン22平方メートル、居室をすべて1室をすべて南向きとし

た。1階は夫婦用が3戸と単身用3室。そのままた2階部分に居室を

暮らしの場」として敷地の半分を共用のスペースに割いた。ガーデン・菜園の部分がその7割を占める。1階の居室の目の前に菜園を配置、みんな育てたナス、キュウリ、トマトがたわわに実る風景を楽しみ、新鮮な野菜を食卓に載せてもらおうという趣向。多目的ルーム外のテラスでは緑陰のパーティーの場を想定した。

増田は「これは入居者のみなさんがどんな家づくりをするか、議論をしてみようためのたたき台。自室のインテリアプランはもちろん、全体の構想も変えていただいて結構。最後は住む人たちが満足するかたちになればと願っています」という。

これから入居希望者の募集に入る。この家の運営の方法、暮らしのあり方など検討すべき課題はたくさんある。(敬称略)

プロジェクトN

⑦

共生への決断

奈良市西大寺のターミナル近くにある区画整理事業用地の一角に共生型のグループハウスを建設するプランが持ち上がった。9月、建築家増田史男による2階建て13戸（夫婦入居3、単身入居10）の設計原案が出来上がり、建築費と運営諸経費の概算を増田の古巣であるパナホーム（株）の元同僚たちの協力ではじき出すことができた。最大の課題は、だがが運営主体になり、どのような運営するのか、その骨格になる組織のかたちを固めることだ。

増田と向平は税理士など何人もの専門家を訪ねる一方、大阪府などが主催する起業相談会などに出席し、最もふさわしい運営組織のありかたを探ってきた。「ナルク暮らし」と住まい研究会の関連版である「ふれあいの暮らし方研究会・埼玉西」の立ち上げに側面協力を申し出た鰐淵祐司・コミュニティネットワーク協会理事との出会いは、視野を大きく広げることにつながった。

鰐淵はさわやか福祉財団の堀田力理事長らが代表を務める「共生型住まい全国ネット」の世話人であるだけでなく、横浜市で開設されたばかりの共生型住宅施設の世話人を兼ねる。関東を中心にNPOやボランティア組織など民間が進める共生型住まいの現況につ



新春7日、西大寺の現地では地耐力測定と地積測量が

入居権相続に妙案

いくわしく話してくれたい。運営だが、NPOを目指すものもある。自宅を改造して6戸が入居する「グループハウスさくら（埼玉）」「オーナー夫妻が8戸と暮らし田園生活館（千葉）」、新居を建て12人定員の「しずか村」（静岡）、

地主が建て14戸定員の「シャロームつきみ野」（神奈川）など個人資産活用の場合はどうしても小規模になりがち。

逆に数10人規模の施設型は株式会社による経営がほとんど。資本金1000万円以上の資金力や資産を活かして有料老人ホームやマンションのスタイルに自立・共同・福祉の運営を盛り込み、増設や新規の設立も増えている。

一方、人の輪による運営を重視するのがNPO型。代表的な例として知られる「COCO湘南台」（神奈川）「企業組合」の方式を知った。地元奈良で法律総合事務所を経営、高齢者の福祉型共同住宅の建設に意欲を燃やし、研究を重ねてきた人だった。西大寺の現地では奈良市の基盤整備工事が完成、1月初め、地盤の強度測定が行われた。（敬称略）

希望者募集へ
用地整備終え
希望者募集へ
用地整備終え

会を重ね、99年4月に10人入居を実現した。共鳴した地主が建てたものをNPO法人COCO湘南が運営する仕組みで、2棟目、3棟目の建設を準備している。

西大寺プランはどれに当てはめて考えたらよいのか。私たちの考えに最も近くてふさわしいのはNPO型だが、準備期間がたっぷり必要になる。その前に基本的な準備資金を用意できる見通しがないといけない。向平と増田は数万円でも法人が設立でき、高齢者やリストラ組の事業創出として経済産業省が後押しする「企業組合」の方式を知った。地元奈良で法律総合事務所を経営、高齢者の福祉型共同住宅の建設に意欲を燃やし、研究を重ねてきた人だった。西大寺の現地では奈良市の基盤整備工事が完成、1月初め、地盤の強度測定が行われた。（敬称略）

プロジェクトN

⑧

共生への決断

定年後に迎える老後の長さは平均寿命の伸びを考えると20年から30年、女性の場合は40年ということも十分にある。この長い時間をどう生きるか。一方で不況にリストラ、年金の先行きさえ見通せない少子高齢時代にあって息子や娘世代にのしかかる負担の重さは計り知れない。家族に代わる介護の社会化が進んだように、住まいの社会化も考えねばならない。自立と生きがいを保てる住まいのあり方を探る一環として研究してきた奈良市西大寺での共生型住居建設プランは大きなヤマ場には差しなかった。

気心の知れた仲間が助け合って暮らすと言っても、家族が培ってきた営みを絶つものであってはいけない。安心と安全が保たれ、支えあいの糸が連綿とつながり、育っていく場でなければならぬ。そこに住む人たちが日々の暮らしを紡いでいくには、個性の尊重と平等な参加が必要だし、運営の仕組みが現実的で明快なものではなければ説得力がない。

増田と向平は、全国

の「共生型

すまい」の運営実例を検証し、計画している建設規模から、まず数人で

西大寺で開かれた現地説明会



仰天の株式会社案

きる有限会社設立案をつくったが、資金面で生まれかねない。NPO法人の申請案もつくった

いた仕組みではないか。「入居者が全員同額の株を持ち合う。夫婦たっ

たらず2人分。つまり、全員が平等に出し合って共同で経営する。利益がでたら公平に配当する。配当しなくてもいい。その分、みんなの負担が軽くなるだけ。株を買うことで入居の権利を持ち、退去の時は売って投資分を回収しても良いし、相続もできるから子どもの入居だってできる。株式はど公平で平等に参加できるものはない。岩川はきっぱり言った。

かねて入居の希望を聞いていたナルクの会員2人に打ち明けると、株式会社設立に必要な発起人会のメンバーになることを承知してくれた。2人からは新しい住まいを活かした具体的な活動プランも提案された。向平と増田の予測を超える内容だった。仲間が加わり、夢は広がる。

ら否定して

資(借金)を受けること

しい仲間を募る説明会が開かれ、岩川が株式会社

難問もクリア
公平で相続可

えは営利を追求するもの。ハナから否定して

2月14日、西大寺で新しい仲間を募る説明会が開かれ、岩川が株式会

案について説明した。

プロジェクトN

⑨

共生への決断

「子どもに頼らず気の

あった仲間で助け合って暮らす。そんな気持ちでいるナルクの会員は意外と多い」という話題に「その家づくりは私の土地を使って下さい」と昨年3月末に信州旅行を共にした時、ナルク奈良会員のS子から思いがけない提案が出されてちょうど1年が経つ。「では、本気でやってみましょうか」と踏み出した向平と、全面的なバックアップを惜しまない建築家増田が粘り強く取り組むうち、周りに多くの人の輪が出来上がっていた。入居を望む人の中から2人をしのご情熱で実現をめざす人も出てきた。夢が現実

に近づいている。2月末、関心を寄せるナルク会員たちを奈良市西大寺の建設予定地に案内した後、「なぜ、株式会社による運営なのか」に絞った説明会が開かれた。大量のチラシを配り、人員を投入するために販売促進費が大きなウェイトを占める一般企業の手法と違い、西大寺のプラ

ンは口コミが主体。しかも利益を求める特定の存在がなく、必要実費を参加者が平等に分担し合うだけ。運営も共同で責任を持ち、しかも借金はいっさいせず、投入した資金の7割分を子どもたち

に相続できる。知恵を絞った結果であることが強

調された。

「入居者全員が株主・

経営者になり、資金を分割して投資しながら、す

新しい関わりを紡ごう



べて商法の定めに従って家という具体的なかたちに変えていくわけだから、別の事業に投資して失敗でもない限り倒産などありえない。綿密なスケジュールに乗って淡々と進めていけばいい」と「株式会社方式」の提案者である岩川浩税理士の解説に、さっそく入居

安心の仕組み

を申し込む人も出た。会社の設立発起人として向平、増田のほか足田祥清東大阪・大東代表、西野外美元寝屋川・四条畷代表

顔輝く参加者

が紹介された。向平は「後の孤独に脅えるのではなく、新しい仲間と新しい

関係を紡ぎ出すことで、だれも経験しなかった世界を実感できることを楽しみにしている。妻も同感している」と挨拶。増田は「そのお手伝いをしたい」と話した。

足田は「私たち夫婦のことを気にかけてくれる仲間がいると思うだけで老後の心配は何もない。この気持ち

を周辺地域の人たちにも広げるボランティア活動をいっぱいやりたい。そう考えるだけでわくわくしている。本当の第2の人生がこれから始まる」と目を輝かせた。

大病院の看護部長などを経験、ケアマネジャーの資格を持つ西野は「入院生活が3日以上になると、心身ともに正真正銘の病人になる。入居者がそうならないよう、ドクターと連携して出来る限

り在宅で療養できるサポートをしたい。仲間を募って介護支援事業もここで始め、地域の人たちにも頼られる場所にした」と抱負を語った。

3月に追加の現地説明会が行われた。夫婦での入居に関心を持っている6人。「入居者本位の設定がされているのは驚き」「これからのことを考えると、夢のような話と感想が漏らされたが、いざとなると決断は難しい。このあと開いた発起人会は、希望者それぞれが抱える事情に配慮しながら希望をかなえる努力を重ねていくことを決めた。

夫婦などの2人または単身での入居者が7割がた固まった。残りスペースの入居について募集を続ける。問い合わせは向平(☎&FAX0742・4309584)へ。

(敬称略)

西大寺での現地説明会

プロジェクトN

10

共生への決断

02年7月にスタートした同時進行ルポ「プロジェクトN」共生への決断は4月下旬、進退の大きな試練に立たされた。向平と増田、さらに仲間を加え、全力投球で進めてきたプロジェクトだが、奈良市内の建設予定地が、使用を断念せざるを得ない事態に陥ったのである。

2人にとってこの1年間の軌跡は、表現しきれないほどの人間ドラマとの遭遇であった。歴史の上でも経験したことがないほどの長い時間を生きねばならない「老後」と

いうるつぼの中で、さまざまなかたちの葛藤が渦巻き、針路を模索する人々がいた。生々しい現実を見聞し、高齢社会の深層に触れた思いだった。

まさかの暗転 結束は乱れず

連載第1回の冒頭に次のように書いた。
「老い」は誰にもやってくる。だからこそ可能な限り安らぎのある暮らしを求めたい。血縁を超えて助け合って暮らす共生の家を造れないものだろうか。もちろん、それは決して容易なことでは

ない。数多くの様々な決断」と「選択」が必要となる。私たちは「筋書きの読めないドラマ」でもあることを承知で踏み出すことにした。

その「決断」と「選択」が、いかに難しいものかを感じ知る日々だった。直接の例だけで200

人近くの人々に計画を明かし、プロジェクトへの参加を呼びかけてきた。計画の意義を否定した人は5指にも満たない。ほとんどは賛同してくれた。しかし、いざ「決断」となると、揺れた。子どもたちへの説得、経済上の問題、病

気や健康不安、老親の介護……。入りたくても入れない事情を抱える人もいた。「今の家を捨ててまで移る勇気がない」が最も多かった。

夢つなぐ適地探し

人近くの人々に計画を明かし、プロジェクトへの参加を呼びかけてきた。計画の意義を否定した人は5指にも満たない。ほとんどは賛同してくれた。しかし、いざ「決断」となると、揺れた。子どもたちへの説得、経済上の問題、病

気や健康不安、老親の介護……。入りたくても入れない事情を抱える人もいた。「今の家を捨ててまで移る勇気がない」が最も多かった。

デンマークの高齢者福祉事情に明るい松岡洋子さん(西宮市)は「老いるほど勇気や決断も鈍る。だからあの国では50代前半から高齢者住宅への入居の引越しの準備を進めている」と話してくれた。その入居の引越しがどれほど大きな意味を持つか、私たちはプロジェクトを進める中で実感した。同時に「不況、リストラにさらされ、老後の見通しさえ

つかない自分たちにとって、このプロジェクトは希望を抱かせてくれる。なんとしてもやり遂げてほしい」と激励のメールを送ってきたのが「団塊の世代」の人々だった。

そんな中で、50代の夫婦、60代の4夫婦、70代の単身2人が入居を決断。新居を造るための出資金預け入れも淡々と進んだ。前回までに述べたように株式会社による運

め、元会社寮など既存施設の活用なども含めて広く探ることになった。

営とし、社名も「安寿ネット」と決めて登記の手続きも済ませた。「安寿」は「あす」と読み、安らぎと喜びを共にし、「明日」への希望を拓くという願いを込めたものだ。高齢・単身の2人のた

めの食事づくりや、やがて訪れる介護の問題について女性たちが話し合っている。男性たちは井戸を掘っての菜園づくりやガーデニング、さらにIT機器の活用など夢をふくらませていた。仲間同士の助け合い」というナルク

とメンバーを励まし、入居を決断した人々たちも全員そろって揺るがなかった。再び出発が決まった。朗報も届く。プロジェクトを側面から支えてくれている企業の幹部が「新候補地の斡旋」を申し出てくれ、「小さいですが、駐車場を使ってくれ



◆ 私たちは人生の終章を助け合って暮らし、人間らしさを全うしたいと考えている。同じ思いを持つ人たちとの連帯を目指して「情報の共有」を志すこの稿は、今後も随時掲載していく。(敬称略)

プロジェクトN

⑪

共生への決断

ひとつのことでなくても気持ちが合えば、うれしくなる。それが二つ、三つと重なれば、いい仲間になれる。困ったときに、ためらいもなく手を伸ばし合える人と人が、元氣なうちからいっしょに暮らせば、明るく確かな老後が紡げるに違いない。

しい仕組みとして、今年4月には株式会社による組織「安寿（あす）ネット」を設立。出資金もそろい、住まいの着工準備にかかろうとしたとき突然、奈良市の土地所有者から提供を拒絶され、計画が白紙に帰した経緯は6月号で報告した。

こんな夢を乗せた「共生の住まいづくり」に挑んで1年余り、50代5人、60代5人、70代1人が集まった。入居者の公平な権利を守り、公正な運営を目指すのに最もふさわ

さあ斑鳩で夢実現

斑鳩の現地を見る安寿ネットのメンバー



奈良支社長と森井成和・法人営業所長は業務の域を超えて奔走。2人の話を聞いた奈良県農協（J Aならけん）の高岡正輔・資産管理事業課長代理か

ら協力の申し出があった。3人に共通するのは「高齢社会を拓く灯を消してはならない」という思いだった。

J Aの提案は、奈良県斑鳩町の「いかるがの里服部農住組合」が進める区画整理事業地。第1期の27戸を分譲し各戸の建設が始まっている。公園を中心に周囲を住宅が取り囲み、全戸にガーデニングスペースを用意して農と住まいの調和を図

り、居住者全員で協定を結んで住みよい環境を守ろうという新しいかたち

支援広がり 高まる関心

10月末に街づくりのモデルとして国土交通省から大臣表彰を受けたばかり。JR法隆寺駅まで徒歩10分、大阪・天王寺まで快速電車で20分のアクセス。南が広大な田園に面し、法隆寺などの古寺や「いかるがホール」に15分余の文化的な環境にも恵まれた格好の地だ。

農住組合の地主Mさんが安寿ネットへの50年間の用地提供を快諾。10月16日にはMさん、J A、安寿ネットの3者が定期借地権設定予約契約書に調印し、新天地での出発が決まった。

土地は第2期計画地内の704平方メートル。夫婦用6室、単身用2室の2階建ての家づくりをし、菜園、花壇をたっぷりとる計画で、来春に着工し、秋の完成をめざす。

斑鳩計画に深く関わってきた高岡課長代理は、安寿ネットの参加を大歓迎。11月12日に東京で開かれる「農と住の調和したまちづくり研究交流集会」で農住組合の実践を報告し、パネル討論「少子・高齢化時代の農住まちづくり」のパネリストとしても発言するが「安寿ネットの取り組みもぜひ紹介したい」という。安寿ネットも現地を案内する報告会を計画している。問い合わせはFAX・0742・43・9584（向平）へ。

プロジェクトN

⑫

共生への決断

50代から80代の熟年世代が共生の住まいづくりを進めようと集まった株式組織「安寿（あす）ネット」。その場の提供に尽力してくれた「JAならけん」（奈良県農業協同組合）と斑鳩町の「いかるがの里服部農住組合」も、「農ある暮らし」という新しい住まい方を目指す組織。安寿ネットは強力な後押しを得て夢の実現に進むことになった。

「JAならけん」は大阪の通勤圏にあつて農と住の共存を図るモデルプロジェクト。菜園をたっぷり

つた住まいをめざしていた安寿ネットにとつて願つてもない土地だった。聖徳太子ゆかりの歴史「十七条憲法」の冒頭に

和を生む豊かな緑



いかるがの里のイメージ図

のふるさと斑鳩町。「いかるがの里」も街づくりのモットーは聖徳太子が「十七条憲法」の冒頭に

1戸あたりの敷地は1ハナミズキなどのシンボルツリーや雨水タンク、生ゴミ処理器を贈り、年間を通して植栽や野菜作りを指導・応援していく。安寿ネットの用地は、已浪彰司組合長が定期借地で提供してくれた西ゾーンの南端部4戸分。そこに8世帯が入居する2階建て1棟を建てることになる。南に田園が広が

掲げた「以和為貴」（和をもって貴しとなす）。心豊かな環境でこそ「和」のある街が生まれると考えたからだ。服部川をはさんで東ゾーン（27戸）、西ゾーン（27戸）に分かれ計1・74ha。各ゾーンの中央に設ける公園を囲むように各戸の玄関が向き合う。車は進入できず、駐車場はすべて後背の外周道路沿いに設ける。土地区画整理事業法で開発面積の3%と定められた公園・緑地用地を8%まで広げ、通常は20%台の道路、遊水調整池、ゴミ集積所などの公共部分にも計38%を充てる。

理想の立地で農ある暮らし

敷くといった「いかるがの里特別仕様」の採用を呼びかける。環境を守るために地盤の変更や敷地の分割を禁じ、外構を生垣や見通しのいいフェンスとするなど「まちづくり協定」への参加が条件になる。JAは各戸にヤマボウシ、ハナミズキなどのシンボルツリーや雨水タンク、生ゴミ処理器を贈り、年間を通して植栽や野菜作りを指導・応援していく。安寿ネットの用地は、已浪彰司組合長が定期借地で提供してくれた西ゾーンの南端部4戸分。そこに8世帯が入居する2階建て1棟を建てることになる。南に田園が広が

り、金剛、葛城の山並みを遠望できる。「かけがえのない好立地に住めること」がうれしくてならない。住民の7割が30代後半から40代前半の人たち。子育て支援のボランティアなどで仲良くお付き合いし、新しい街づくりに参加していきたい」とメンバーたちは胸をふくらませている。

高齢者が孤独にならず

から、住まいは「コミュニティ

元気に過ごせる時間をいかに長くするか。そのために気心のあつた仲間と一緒に暮らし、互いの経験や智慧を活かしあつて生きがいを見つけ、地域のボランティア活動にも役立てれば——。こんな「共生への願い」の実現をめざして50〜80代のナルク会員ら13人でつくった。

ニティーハウス法隆寺」と名付けられた。設計プランは、メンバーの一人で福祉関連施設設計の専門家である増田史男が描いた骨格案をもとに、E&A設計（大阪）の先進建築家、秋元勝哉が肉付けして完成した。増田はかつての

空

とに置かれた。この条例

コミュニティハウス法隆

は「高齢者、身障者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律」に沿ってつくられており、本来は病院など公共施設が対象。この寺の場合は対象外だが、シニアの暮らしに快適さを求める増田と秋元はあえてこだわった。完成すれば条例適用施設の認定を申請する。



“火”を使わない料理を勉強

建物は鉄骨づくりとし、可能な限り高い技術水準を求めた。外壁、床仕切壁の強度を高め、遮音、防火、断熱効果を上げるために数々の工夫を加えた。ガラス面は結露を防ぐため、空気層を挟んだ二重（ペア）ガラスを採用。シックハウス対策として材質、塗料、接

降階段もあるが、車いすで乗れるエレベーターを設置。あとは廊下、出入り口、個室のトイレ、浴室を含め、車いすで利用できる広さを取り、手すりが随所に設けられた。

全館に自動火災報知網を配備し、全戸に緊急ボタン2個、各階から消防(救急)署へ直通で通報でき

居者の希望で採り入れる。電話、インターネットは最速のe。メガファイバー（関西電力）を導入し、IT時代に対応した暮らしが楽しめる。

これで「究極の快適生活」が営めることになるが、入居メンバー、建設を担当するパナホーム奈良支社の双方にとって

法隆寺ハウス
設計まとまる

着剤はとも 応の点
に「4星ク など、
ラス」の対 ている

灯設備や施錠対策
防犯面にも配慮し

応で心配のないものを使用。加えて館内と全室を24時間換気にする。

全館が障害のない「バリアフリー」仕様。1階は玄関先からスロープで入り、2階建てなので昇

全館・全室がオール電化であるのも特徴。火気を使わずにすむよう、キッチンは一日クッキングヒーターを採用。さらに共用部やホールは電気床暖房とし、各個室にも入

研究を始めた。

「高齢者の住まいのモデルに」を共通の目標に掲げ、設計、建設、設備関連企業と入居者による協働の努力が続いていく。

（敬称略）

（敬称略）

プロジェクトN

⑭

共生への決断

日本で初めて世界遺産に登録された法隆寺がある奈良県斑鳩町。その田園の一角に共同出資で住まいを建て、助け合って終生の暮らしとともにする「コミュニティハウ

中部1人と広範にわたる。13人の選定には格段の基準があったわけでは

ない。助け合って住む「共生」への参加の意思が確かで、分担金を負担できることぐらいが「条件」

夫婦での入居は現役共働きの50代1組と、退職者の60代4組。単身者は70代の男性と80代の女性2人の計3人。現在の居住地は、大阪、奈良など近畿が9人、関東3人、

た発起人たちは当初、だれもが抱えることになる。老後の課題と対策についての勉強会を開くことかから始めた。具体案を組み立て、建設候補地にも再三案内した。手紙を送り、

中部1人と広範にわたる。13人の選定には格段の基準があったわけではない。助け合って住む「共生」への参加の意思が確かで、分担金を負担できることぐらいが「条件」

願い実り着工間近

だつた。

共生の家づくりを志し

た発起人たちは当初、だれもが抱えることになる。老後の課題と対策についての勉強会を開くことからは始めた。具体案を組み立て、建設候補地にも再三案内した。手紙を送り、

出會つて話した人を含めると300人以上になる。ほとんどの人が「共生」の大切さには共感を示しながら、いざとなると微妙に揺れた。他人同士が集まつてうまくいく心配「実際に建物が建ち、運営の様子をみてから考えたい」まだ元氣だからもう少し考えたい」「困った状況になった時に入れてほしい。さまざま

念を伝えられたこともあった。「決断」とはいかに難しいものか、思い知らされる日々だった。

あと一歩が踏み出せない人、事情を抱えた人たちがとは、決断すみの仲間がじっくりと話し合つた。ある夫婦から「老母だけでも入れるだろう」と相談された時は、「お世話する相手もいてほしい」という女性たち

夫婦のどちらかが反対
だつたり、人間関係を積
み重ねた地域から離れる
不安で足踏みしたり、家
の処分や相続がらみで子
どもたちに反対されて断
念したケースも。決心し
たという報告の翌日に断

夫婦5人、
3人が

「ええ」
「がそう」
「1年」
「室とな」
「初対面」

夫婦5組と
3人が入居

これがコミュニティハウス法隆寺
(完成模型)



ことか、年代の違う者が共に暮らせば学びあふ共通の思いを。こをにかけて満ほとんが一緒に住も

「素敵な人ばかりが集まった。不思議だね」これからみんなでつくる新しい人生。未経験の世界を知るのが楽しみ」と口をそろえる。昨年末、50代の夫婦が大学生だった自慢の長男を交通事故で失った時、次々と仲間が

いたら、ここに入る決心はつかなかった。元氣なうちだから決断できた。ぎりぎり間に合ったというのが実感」と安寿ネツト代表のひとり、疋田祥清(68)はいう。4月の佳日を選び、いよいよ善工の鍬が入る。(敬称略)

う」という共同の意思が、様々なしがらみを超えさせたといえる。

「権利は均等、情報は共有。話し合いですべてを決める」が大事にされ、争いや意見の食い違いは皆無。

「あと少し歳を取って

「あと少し歳を取つて

プロジェクトN

⑮

共生への決断

50代から80代のシニアが資金を出し合い、株式会社(安寿ネット)の形で終の住処をつくる「コミュニティホーム法隆寺」の起工式が4月17日、奈良県斑鳩町の建設現場で行われた。入居家族代表12人と計画を支えてきた地主の已浪彰司・いかるがの里服部農住組合長、柿内輝義・奈良県農協常務理事、松井信也・パナホーム奈良支社長ら48人が玉串を捧げて無事完成を祈った。

計画が持ち上がった2年前からボランティアで

プランづくりをしてきた増田史男・住まいとまちなみ研究所長(宝塚市)の感慨は格別。福祉施設、高齢者住宅などの建築にかかわって30余年「人間らしく住むことを大事にした共生型住居が求められる時代への先例を拓きたい」と抱き続けた。

安全に最大の配慮

成だった。入居者のささやかな声にも耳を傾け、先進のアイデアも取り込んで設計に反映させた。まず「仲間と共に助け合う住まい」を日常の生

活シーンで具体化するたし、誕生パーティーなどめ、建物1階中央に共用のイベントの場、入居者が地域社会に活動を展開が深まる仕掛けを用意した。多目的ルームは20人た。映像設備のスクリーンにもなる広い壁面は絵

セキユリティー。現地は坂のない平坦地なので、道路から玄関に入り、室内に至るまでバリアフリーを徹底させた。スロープ、エレベーター、廊下

3つ目は、助け合いの道しるべとなる。その姿が現れるのは、9月下旬になる。



入居者や関係者による地鎮祭

画や写真・手芸を発表するギャラリーを兼ねる。

その周りには共同で調理を楽しむ厨房、入居者の来客が宿泊できるゲストルーム、車椅子で利用できる共用トイレや眺めのいい南側に野外パーティーが楽しめるウッドデッキを配置した。建物の周囲には菜園や花壇ス

・通路、ドアなどは幅を広く取り、随所に手摺りを設けた。

1を尊重する点に力を注いだこと。各室の間取りやインテリア、設備も知恵を借りながら本人がデザインするコーポラティブ方式をとった。

全館・各室に光ファイバーを導入して最新の情報・通信技術を活用するとともに、避難誘導用の照明、自動火災通報装置、各種感知器、電気錠に加え、非常用押しボタンを各室に配備した。オール電化で炎の

ひとりになれる眺望ポイントを2階に設けた。共同生活の中でも、ときには孤独を楽しみたいこともあると考えたからだ。図書・展示コーナーを兼ね、前面には田園と山並みが広がる。

万感の鋤入れ

9月には完工

出ない生活なので火事の心配はほ

世界遺産の法隆寺がある地域だけに、白壁の蔵をイメージして濃茶と純白の壁面で仕上げた。ホームのシンボルとして玄関上屋に設けられた「丸窓」は、夜は光を放って道しるべとなる。その姿が現れるのは、9月下旬になる。

ペースもたつぷり。

2つ目は

急に直通で連絡できるようにした。屋外も防犯灯のほか、センサーライトを随所に設けた。

3つ目は、助け合いの道しるべとなる。その姿が現れるのは、9月下旬になる。

プロジェクトN

⑬

共生への決断

大阪・難波の高層住宅

る。

に独りで住む藤之木寛一郎さん(ナルク吹田会員)は、この4月で75歳になった。奈良県斑鳩町に建設が始まった共生の住まい「コミュニティハウス法隆寺」に入居する13人のうち、男性では最高齢者。その年齢でよく決断できたね」と言われることが多いが、入居の日をわくわくしながら待っている。「終の住処を求めて転々とした。やっと新しい人生の居場所を見つけたことができた。もう、楽しみで」とここにこそ大阪府吹田市の団地で夫

長い旅路だった。戦後の混乱が収まった昭和27年、繊維産業が盛んだった大阪で業況調査会社の立ち上げに加わり、役員

の一人として全国に支店網を展開、スタッフ300人を擁する企業に育つまで働き続けた。00年5月、70歳

を機に引退、その1カ月後に、妻喜美恵さんに人が見つかった。6月に入院し、手術を受けたが、医師は首を横に振った。

大阪府吹田市の団地で夫

老人ホームもケアハウスも経験した藤之木さん



ついに得る理想郷

婦2人で過ごしてきた半生。「仕事を離れたら、老人ホームへ行こうね。話し合ってきたことを実行に移した。妻の生地である岡山県

新見市に近い倉敷市で老人ホームを探し当て、入居出来たのは、翌年の2月。しかし、ここで喜美枝さんと過ごせたのは3カ月だけ。帰らぬ人とな

出し、自宅に泊まる日もある。2重生活を続けた。にぎやかな会話、人とのふれあい、生きていたのが、入居者自身が共に世界が欲しかった。頼ま

合わず、入浴と食事をすすすと外仕組みが出来上がって、既製品の洋服に合わせるようにしないと暮らして行けないことに気づいた。そんな時に会ったのが、入居者自身が共に世界が欲しかった。頼ま

「仲間の畑仕事を手伝い、地域のボランティアもいっぱいありますよ。調理は奥さんたちが応援してくれそうだから」。

った。寝静まった夜のホームの静けさが身にしみて寂しかった。妻の1周年忌をホームで営んだ後、吹田市の自宅に戻ったが、妻任せでただに家事は苦手。同市のケアハウスに入居したが、入居者のほとんどが80歳以上の女性で、男性2人は最年少。生活のリズムが

れて引き受けた青年代議士の後援会長の活動の傍ら、ナルク吹田に入会。同市のNPO「高齢社会をよくする会」では理事として高齢者の住まいづくりの研究に熱中した。姫路、芦屋、東京、千葉

宅も清算して、大阪の真ん中の高層住宅に移ったが、荷物はほとんどどどいていない。交通、買い物物のアクセスが格別で、高齢者に人気の物件ではあったが、あくまで斑鳩に移るまでの仮住まいなのだ。関わってきた様々な仕事も整理して新しい出発を期している。

日々胸弾ませ 完成待つ75歳

住処」を探した。その中で入居に心が

斑鳩に移るまでの仮住まいなのだ。関わってきた様々な仕事も整理して新しい出発を期している。

プロジェクトN

16

共生への決断

奈良県斑鳩町で「コミュニティハウス法隆寺」の基礎工事が始まった5月末、入居者のグループ「安寿ネット」に思いがけない誘いが届いた。申し出の主は「共生の住まい全国ネット」。共生型住まいの施設はもちろ

ろん、長寿社会文化協会、市民福祉団体全国協議会、全国コープ住宅推進協議会などの団体、NPOや大学、建築家集団などの計300人が加入する全国横断組織だが、総会を兼ねた「初夏の集い」で、安寿ネットの活動を

発表して欲しい、という内容だった。

計画の当初から安寿ネットの設立を経て「コミュニティハウス法隆寺」実現に至るまで尽力してきた増田史男・住まいるとまちなみ研究所長(ナルク宝塚・川西会員)

が資料を携えて東京へ向かった。

増田所長は安寿ネットのメンバーが大事にしてきた「共生の住まい」に

対する考え方について時間をかけて話した。「その後、どこで誰と暮らすか。

現地を訪れた全国ネットの岡本事務局長(右)



全国ネットが注目

終の住み処を考えると、3つの場所がある。1つ目は夫婦・子どもといたった血縁と共に住む。2つ目は老人ホームなど税金や社会的資本など公

共の場所に頼る。3つ目は価値観の合った人たちと助け合って暮らす。私たちは第3の道を選んだ。とはいえ、価値観を共にすることは容易では

ない。だから「最初に家ありきでなく、人ありきに徹する」ことにし、老後のお金、健康、いかに助け合って暮らすかについて

の勉強会を何度も開き、「人と人の見合い、考え方の照らし合いを大切にしたい」ことを説明した。

「共生型住宅」の場合は、会場に驚きが広がり、

招かれて講演
秋には見学会

「本場に資金は大丈夫なのか」「コストはどれくらいか」など、質問攻めにあつた増田所長はこ

う答えた。「入居者自身が土地探しをし、公平な負担を考えた末にたどり着いたのが、建築費の基本部分を均等の株式を持ち合う形で出資する株式会社方式。入居者イコ

スが多い。安寿ネットの方式は、まず「共生の住まい」に関心を持つ人たちの募集、勉強・交流会を重ねる中で「納得できた」人たちを自然なかたちで絞り込み、土地・資金の見通しがついた上で建設にかかる。従来型とは全く逆の手法なのだ。

「入居者同士のあつれきは」の質問にも「出会いの段階からすべて話し合ってきたからトラブルはゼロ。皆が信頼し合っ

て入居後の暮らしを待ちわびている」と答えた。岡本健次郎・共生の住まい全国ネット事務局長は「共生という目的にとっ

プロジェクトN

18

共生への決断

奈良県斑鳩町の共生の住まい「コミュニティハウス法隆寺」の建設は急ピッチで進み、7月10日に棟上げ式が行われた。正田祥清は施主である株式会社安寿ネットの代表のひとりとして「乾杯」の言葉をとり、「間に合ってよかった。あと少し年齢をとっていたらこの場にいなかったかも知れない」と、喜びと安堵感をかみしめながら挨拶した。入居する秋には満69歳、古希を迎える。

大阪と奈良を隔てる生駒山麓の傾斜地に戸建て

の住まいを構えたのは25年前。入居当初は眼下に広がる大阪、神戸の夜景が自慢で、私鉄駅直近の便利さもあってよく友人を招いた。「仕事を離れたら、坂道のジョギングを楽しみたい」とも言ってきた。

よくぞ間に合った



上棟を喜ぶ正田(右端)

えるようになった。郵便局、図書館、ショッピングセンターなどは、車を使えば数分で行ける範囲。困難を感じた

ことはなかったのだが、徒歩で買物に出かける妻の治子(66)から「帰りの上り坂は大根一本が重い」とこぼされた時、

車に乗れなくなる将来のつらさを悟った。

坂の下に建てられるマンションのモデルルームを訪れ、申込書に職業・年収の記入欄があるのを見て愕然となった。「仕事のない高齢者はお断り」と言わんばかりの姿勢に腹が立った。02年6月、自宅を「終の住処」と決め、600万円をかけてバリアフリーに改造した。「子どもも来てくれるだろうし」と自分を納得

早めの決断の大切さを痛感

得させたが、吹っ切れないものが残った。その年の秋、スイスの福祉施設などを訪ねるナルクの海外研修旅行に参

加。インターローケンの町の老人ホームで4階の個室にいた95歳のおばあちゃんと話し込んだ。「子どもが成人したら自分の幸せを考えればいい。私はもう、子どもや孫のことを考えない。ここが気に入っているし、満足している」。ペランタに立つと、緑の向こうにユングフラウの白い峰が光っていた。「いいでしょ。この眺め全部が私のお庭なの。頭をガツンとやられたほどの衝撃だった。老後は自分のために生きるべきだ、それが本当の幸せなんだ。

の住まいの勉強に身を入れた。入居予定者で安寿ネットが生まれた時、妻も大賛成で加わった。「よくぞ間に合ったと思う。建設費として1000万単位のお金をひねり出す決断は、もう少し歳をとればとてもしなかっただろう。早めの決断、早めの引っ越しがいかに大切か、つくづく思う」と正田はいう。

◆ 共生の住まいづくりに欠かせない「早めの引っ越し」は50代でも決して早くないと言われる。次号で「コミュニティハウス法隆寺」に入居する「団塊の世代」夫婦を紹介する。(敬称略)

◆ お断り 7月号の連載番は「19」でした。

プロジェクトN

19

共生への決断

奈良県斑鳩町にできる「コミュニティハウス法隆寺」の入居者で最も若いのが須崎敏雄(53)と民子(57)夫婦。敏雄は医療機器メーカーの技術者、民子は看護師として働く。いわゆる団塊の世代の2人が入居を決断した背景は、この世代に共通する新しい家族の生模様で彩られる。

長女未来と長男健人が生まれ、東京・多摩に小さいながら1戸建ての我が家を持ったのは80年代の初め。健人が入った小学校の親子、先生との交流は楽しかった。3年生

へ進級の時、担任教諭が母親全員にカーネーションを1本ずつ贈ってくれたのをきっかけに「カーネーションの会」が生まれた。交際はその後も続き、母親たちが「将来はいつしよに住もう」と、本気で話し合うほどに親しかった。「血縁より結縁」を大事にするニューファミリー世

父と息子の死越え

代が描いた「夢」だった。だが、厳しい現実が追いかけてきた。東京の印刷会社で75歳まで働き続けた父が仕事を離れて間もなく母が世を去った。老健施設、特養ホームを

身の回りのことは何もできないう身で一人残された父は、共働きと子育てに追われる息子夫婦を気遣ってケアハウスに入所。父に洗濯物を届け、カギ



健人君の遺影を前に須崎夫妻と未来さん(右)

してくれた独身の叔母、久枝(80)がいなかったらどうなっていたか。

敏雄の転勤で一家は阪神大震災の年に大阪に移り住んだが、リストラの陰が忍び寄る。技能、経験を活かした仕事を持つ2人だけに、当面は働く場を維持できそうだが、老後のこととなる

と見通しは立たない。民子が探し出した株式会社方式による共生の住まいづくり「安寿ネット」の計画に賛同し、参加を決めたのも、そんな思いからだ。就職するまではお前たちの面倒を見る。その後は自立しろ。俺たちのことは考えなくていい。敏雄が切り出すと、2人の子どもはうなづいた。

家計節約のため一家が安い賃貸マンションに引っ越したのは昨年末。未来は22歳で大阪の会社に就職が内定。健人は19歳で大学1年生。「親父、あと3年だけよろしく頼

夢ふくらます

団塊世代夫婦

決断した。健人の学費に積み立てた分を、叔母を呼び寄せるための部屋の購入費に充てることにしたのだ。父の面倒を見てくれた叔母に、父と同じ思いをさせたくない。健人もそう望んでいるはず。安寿ネットも承諾して入居が決まった。

「今を生きるのに懸命で来て、いろんなことが重なって幸運にたどりつけた私たちが、50代早々には老後に向けた引越しを実行すべきだとつくづく思う」と振り返る。

敏雄は「電器や自転車のパンク修理は任せて、民子は「みなさんの健康管理のお手伝いをしたい」と、仲間の役に立つ日を楽しみにする。カーネーションの夢はもうすぐ花開く。(敬称略)

プロジェクトN

②

共生への決断

介護保険制度の誕生で

家族の苦勞が緩和されたといえ「子どもが親の面倒を見る」という日本の伝統的な家族観を超えるまでには至らない。

奈良県上牧町に住む西山英明(58)・栄子(55)夫婦の場合は、自分たちの暮らし、健康の問題に加え、双方の両親の世話めがって文字通り苦悶の連続だった。英明の母

静子(80)が11月、「肉親に拠らない新しい家族の構築」を目指す奈良県斑鳩町のコミュニティハウス法隆寺に入居すること、家族像を変える小さなページを開くことに

なるかもしれない。

英明は塗料メーカーの企画部長。自ら提案したプロジェクトの実現のために全国に出張を繰り返す。休みは月に2日程度しか取れない「会社人間」を自認する。栄子も「夫婦両方の親

の面倒を見るのが子の務め」と結婚当初から覚悟し、家のローンを返すために常勤で10年働いたこともある。高度経済成長から高齢社会への流れに翻弄されながらがんばり抜いてきたサラリーマン家族の縮図でもある。

1984年にさかのぼ

る。2人は栄子の両親を大阪のマンションに引き取る。当時69歳の母が高血圧で倒れたためだ。しかし、両親は「娘の嫁ぎ先に世話になる」ことに肩身の狭い思いを抱き、栄子自身も「本当は夫の両親を見るべきなのに」

と愛知県瀬戸市に住む英明の両親を気遣った。3年後、夫婦は思い切った。奈良県上牧町に2階建て・5LDKの戸建てを購入。双方の両親と住もうとの思いからだった。

引越したほぼ同時に、栄子は大阪の鉄鋼商社に02年「人生のシナリオを進める安寿ネットの代

表は息を呑む思いだった。が、「来てもらいまじょう。私たちが自身の老後を学ぶことになる」という女性メンバーの声で、入居はすんなり決まった。

「コミュニティハウス法隆寺」の竣工披露・見学と説明会を10月31日に現地で開催します。定員30人。くわしくは安寿ネット大阪事務所(☎06・6202・3333)へお問い合わせ下さい。



西山英明と現地を訪れた母・静子(右から)

義母を、次は夫を

働きに出て、小4の娘と小2の息子の世話を病弱の両親に託した。しかし英明の両親は名古屋に留まり、92年に名古屋へ転勤となった英明はそこに単身で赴いて家族は2つに別れる。翌年、英明の父が死去。母と4年半を暮らした後、富山へ転勤

になかったアクシデンと栄子がうめいた事態が起る。乳がんの手術を終えた妹に勧められて診てもらったところ、自身も発症を告知されたのだ。一方で栄子の父が脳梗塞で倒れ、4カ月後に死去。妹の再手術、そして自身の手術。英明は

大阪の本社へ帰任し、2人の子どもたちも自らが得意「手伝って頂く」とがいっぱいありそうです。お母さん。どっと笑いが弾けた。(敬称略)

「コミュニティハウス法隆寺」の竣工披露・見学と説明会を10月31日に現地で開催します。定員30人。くわしくは安寿ネット大阪事務所(☎06・6202・3333)へお問い合わせ下さい。

仲間を託した究極の家族愛

大阪の本社へ帰任し、2人の子どもたちも自

立っていたが、栄子はあ

「私はがんを持っています。末期にある妹の経過から見ても、同じことが私にも起こります。ひと暮らしの夫の母を、その後夫を、みなさんの仲間に加えていただけませんか」。栄子の申し出に、共生の住まいづくりを進める安寿ネットの代

プロジェクトN

②

共生への決断

気のあった仲間が助け合って暮らそうという「コミュニティハウス」が10月30日、奈良県生駒郡斑鳩町小吉田2丁目に竣工した。きっかけとなった用地提供の提案が土壇場で破算となったのを始め、思いを試すかのように次々と現れる課題と取り組んだ2年8カ月。「共生」へ向けて下した多くの「決断」を改めて振り返る。

「コミュニティハウス

「法隆寺」には2つの姿がある。気のあった仲間が肉親を超えた助け合いをめざす「共生の住まい」(コレクティブハウス)

であると同時に、長くなつた老後を安心して安全に暮らせる「終の住処」を、各人好みの設計(コポーティブハウス)で実現している。入居するのは首都圏3、中京圏1、近畿圏9人の計13人。年齢構成は団塊の世代2人に60代が8人、70代1人、80代2人。このうち夫婦が5組、単身3人で男性6人、女性7人となる。

熟年グループが住む家だけに、「老人ホーム」をつくっていると思われがちだったが、それは違つた。世話をされるの「老いの恐怖」を、共生の

「壁」の無い快適さ



ホールの椅子のカラーを決める入居者たち

方的な関係ではなく、互いに独立・自立し、尊敬とが出来る。心配してくる仲間がいるだけでどれほど心強いことか。そんな中で個性、能力、智恵をその人なりに発揮するだけで、助け合いは自然な形で生まれる。

後)は入居者自身の意向を反映した設計のコポーティブ方式を採用。ホール、ピタールーム、菜園・花壇などの共用部は中央部と周辺に配置した。耐震工法を採用し、エレベーターも備えた完全バリアフリー。床暖房、炎の出

自分を生きて他者を支える

入居者が資金を出し合

る人たちの恵まれたケースとも言われたが、総事業費は1億3000万円。つまり1人あたり1000万円。入居者のほとんどは持ち家を処分して移るから、「終の住処」の値段として決して「高い」ものではないだろう。共生の意思を持って計画的に進めれば手に出来る値段でもある。もちろん老いて、困ってからでは遅すぎるだろうが。そして、なによりも掛け替えのないものも手に入れた。だれもが普通の状態でいられるノーマライゼーションの実現。環境、建物のかたち、住まい方、そして互いの心の中にも「壁」を持たないで過ごせる日々だ。ここでの日常生活に、規則と呼ばれるものは無用になるはずだ。

(完)

金を出し合

入居者が資金を出し合

後)は入居者自身の意向を反映した設計のコポーティブ方式を採用。ホール、ピタールーム、菜園・花壇などの共用部は中央部と周辺に配置した。耐震工法を採用し、エレベーターも備えた完全バリアフリー。床暖房、炎の出

る人たちの恵まれたケースとも言われたが、総事業費は1億3000万円。つまり1人あたり1000万円。入居者のほとんどは持ち家を処分して移るから、「終の住処」の値段として決して「高い」ものではないだろう。共生の意思を持って計画的に進めれば手に出来る値段でもある。もちろん老いて、困ってからでは遅すぎるだろうが。そして、なによりも掛け替えのないものも手に入れた。だれもが普通の状態でいられるノーマライゼーションの実現。環境、建物のかたち、住まい方、そして互いの心の中にも「壁」を持たないで過ごせる日々だ。ここでの日常生活に、規則と呼ばれるものは無用になるはずだ。



活動法人(本部 大阪・東京)
アクティブライフ・クラブ
区常盤町2-1-8 親和ビル4階 〒540-0028
5448(代表) FAX06-6941-5130
p://nalc.jp 毎月1回10日発行
elife@nalc.jp 1部 100円

「安住の館」ともに探ろう

NPO提唱で研究会

賛同者募り 講座や先進地視察
9月に始動

安心して老いるための住まいのあり方を考えようという「ナルク暮らし」と住まい研究会」をNPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ(ナルク)が9月にスタートさせる。ナルク会員だけでなく、一般からも研究会員を募集。「元氣なうちに備えよう、老後のくらしと住まい」を総合テーマに、1年間で5回の講座を開き、モデル事例の現地見学などを含めて研究を重ねる。一方で奈良市内の住宅用地を活用し、助け合いながら共同で暮らす「コレクティブハウス」の建設が可能かを有志で探る試み「プロジェクトN」にも挑む。

(4面に関連記事)

介護保険が生まれて2年がたち、高齢者の介護

は大きく改善された。要介護認定を受けた人は290万人に達しているが、施設で介護を受けられる69万人を除いて、ほとんどの人が在宅でサービスを受けている。また、全高齢者2000万人のうち、一人暮らし・夫婦のみ世帯が計700万世帯あり、「人生80年時代」で長くなった老後の暮らしでは、バリアフリーなど住まいの改善や生活設計のあり方の見直しが必要となる課題となっている。

こうした中で、高齢者の住まいの環境を整備、バックアップする「高齢者居住安定法」が昨秋、暮らしの一部を共同

自身も元氣なうちから学ぶ、研究しあつてそれぞれに最もふさわしい場を選択するのが目的。このため住宅メーカーや保険、金融機関などの企業や研究者などにも賛助会員としての参加を呼びかけ、住む側と造る側がともに考え、知恵を出し合う「協働」によって「自

ナルクの「暮らしと住まい研究会」は、高齢者とはなにかを導き出す。①「老いとはなにか」80歳を過ぎると急速に訪れる老化と判断能力の衰え。行き詰まってきたら困ることのないよう心と体の健康、「生きる」とはなにかを考えよう。②60歳から必要になるお金と備え。生活費などから始まってそれだけの貯金があるか、老後の経済的な設計をする。資産の活用、民間信託やリバースモーゲージなどの契約制度も紹介。

③介護、住宅整備の支援。持ち家、賃貸住宅、施設入居など「終の棲家」をどう選ぶか。介護保険、高齢者居住安定法などの仕組みと行政、民間の支援サービスを知る。④新しい住まいづくり。さまざまなまちで始まっている家、施設づくりの先端を訪ねる。海外にも飛ぶ。

⑤豊かな老いの営み。新コミュニケーションの創造。ナルクなどNPOが取り組もうとしている「協働」の活用、民間信託やリバースモーゲージなどの契約制度も紹介。

喜・快

WACアクティブクラブからNALCへ改称独立したときに「アクティブライフ」を創刊し、以来欠かさず活動してきた。朝日新聞大阪本社からスタートをきる▼広告をいたたけは最低3万部の配布額が必須条件とされていたが、会員個々の努力が結果として7万部配布が可能となった▼愛読いただいた「谷町1丁目3番地」も「喜・快」とタイトルが替わる。旧タイトルは発行所所在地からとった▼谷町には明治の初期、大相撲の力士から治療代をとらない外科医がいて、それが「ひいき筋」を意味する「たにまじ」になった。ボランティア団体・NP



桔梗と石仏 奈良・猿沢池近くの元興寺には旧寺域から出土した石仏3000体が居並ぶ。

色